島尾敏雄全集 第10巻

一九八一年七月二五日発行

著者 島尾敏雄
発行者 株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)
振替東京六-六二七九九
堀内印刷・美行製本
© 1981 Toshio Shimao
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島尾敏雄全集

第10巻

日の移ろい　5

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

ブックデザイン　平野甲賀

日の移ろい

四月一日

風は吹きやまず、寒さがもどってきた。このごろ風に弱くなった。風のために戸や窓がさわぎだすと自分の居場所を失ったように思い、いらいらして落ちつきを失う。さし当たってどうしようもなく、風の通りすぎるのを待つほかはない。きのうからずっと吹きつづいているのだ。小鳥が寒さにふるえていて可哀想だと妻は四畳半に坐ったきり、手のひらで覆ったり、ひざのくぼみに入れて遊ばせたりしている。そしてときどきは自分の歯で噛みくだいた菓子を割箸の先にくっつけて小鳥の口に入れてやると、裂けそうなほどもくちばしをあけてむしゃぶりついている。でも満腹するとしらんかおをして決してくちばしをあけようとしない。妻はそれがおもしろいという。巣の中にもどそうとしてもいやがって手のひらにしがみつくのだという。

昼からしばらくのあいだ眠った。眠りはらくだが、目ざめが寂しい。妻は四畳半で小鳥を手のひらに包みこんでいた。私が眠ったあいだもそうしていたのかと思うと目先がくらくなった。いつまでも

そうしているつもりかときくと、そんなことはないと小鳥を巣の中に押しやって籠ごと台所の方に持って行った。生まれてまもないひなを買って来たので、小さな頭のあたりの毛が充分生えそろわず、すけて寒々としていた。

夕食まえ、あ、クマが死んでいる、と妻が言った。クマは小鳥につけた名まえだが、それがなんという鳥なのかは知らない。覚悟はしていたがはかない思いがして家の中がくらくなった。私はこたつの中でドストエフスキイの「悪霊」を読んで圧倒されていたところだ。自分が小説を書くなど笑止、と思っていたところだ。みんないっしょに集まればいくらかでもにぎやかになると思い、妻のいる台所に行ってマヤも呼んだ。妻は煉炭七輪の上でクマをあたためていた。マヤの好きなテレビもつけた。だんだんあったかくなってくる、と妻は言った。巣の外に出てそのうらのあたりでぼろきれのように伸びていたという。目もつぶりすこしも動かなかったけれど、首がやわらかだったから、手のひらに入れてあたためていると、すこしずつ体温が出てきたのだそうだ。台所で三人そうしているとみんなが小鳥に見えてくる。風はいつ止むかわからない。あ、動いた、妻がそう言ったとき思わず私はほっとした。でもそんなことがあるのだろうか。私ならすぐ断念してしまうかもしれぬ。ほらこんなに元気になったと妻が言ったので、テレビに目をやっていた私はやっと小鳥をまともに見た。くちばしはとじたままだが妻の手のひらの上でよろよろと立ちあがった。もうだいじょうぶ、と私は思った。こんなにうまくいくこともあるのか。やがてクマをマヤに持たせて妻は食事の用意にかかり、私はビールを飲みはじめた。マヤはすこしもいやがらずに、妻に指図された通り、七輪の火であたためながら手のひらで包んでいた。小鳥を手のひらに持つことなど、私はとてもできはしない。そんなことをし

ていたらたいへんだと思うのに、妻もマヤもたのしい、と言っていた。すこしずつビールの酔いがまわり、らくになった。背中の方でばたばたとクマの羽ばたく音がした。私は七輪に背を向けて坐っていた。とうとう元気をとりもどした。そのうち、くちばしをいっぱいにひらいて餌をねだりだすだろう！　と不意に妻が、あ、死んじゃった、とかわいた声で言うではないか。まさか、と私は思った。逃げだすようにひと羽ばたきしたら、ちょっとだけうんこをして、死んじゃった。妻がとどめをさすように言っていた。ほら、もう動かない、見てごらん。死がなぜこのようにしてやって来るのか。私は見るのがいやだった。ほらほら。妻がなお見せようとする。せっかく飼いはじめたのに、気持ちがへんにならないか。私はそちらを見ないで言ってみた。だいじょうぶ、だいじょうぶ、死んじゃったものは死んじゃったものだわ。妻が言った。ちらと目を向けると両手で羽根をひろげ、吊り下げるようにしてかかげたので、小さな鷲の徽章のかたちでいかめしく威張っているように見えた。あ、もう硬直をしはじめた、ほらこんなに硬くなった、もうだめ、さっきとはちがう、と妻は言っていた。マヤは涙をうかべている。私がさっきいつまでもそうしているのかなどと言わなかったらどうなっていたかと思った。どちらにしてもいずれ寒くて死んでしまったろうと思ってみることにしたが、それで納得できたわけではない。死んだものは死んだものだと思えばいいのか。妻は羽先をかきわけなどして死骸をいつまでもながめているのだ。私はその姿勢に打たれるが、早く埋めてきなさい、と口に出してしまうのだ。そんなことが言える資格は私にないのに。風の吹く庭に出た妻の、さくさくと土を掘る音がしめっぽくきこえていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

四月三日

寒さがとれない。小雨。図書館で机の上を片づけた。雑多な資料や、読もうと思った書物がすぐうずたかく重なって机面がうまってしまう。それを整理しながらすこしずつ片づけて行くことはたのしい作業だ。ひとつには捨てる行為がともなうから。身のまわりからなにかを捨てて行くことにはさわやかな体感がある。そうわかっていてなかなかそれにとりかかれない。とりかかるまでからだと気分に重い重いおもしがくっついているみたいだ。

四月四日

雨が降ったりやんだりしてうそ寒い。ところで図書選択の仕事もたのしい作業だ。きまった予算の中から図書館が買える冊数は少ないが、新聞広告、週刊書評紙、出版案内のパンフレット、古書目録などの中から、あれを捨てこれを取る作業がおもしろい。捨てるものの方がもちろん多いが、それがやはりさわやかな体感を残してくれる。えらび定めた書物は、書名と著者と発行所と値段を主題の分類別に記入する。たのしく、さわやかだけれど、それは同時に胸もとがあせりに食いつかれている状態と紙一重なのだ。このほかの仕事がなにもなければいいが。すぐいらいらした感情にすべり落ちてしまう。居ても立ってもいられなくなって、書庫にはいると、ほこりが沈静した気持ちになる。背文

字を読み、分類記号を合わせるだけがいい。中をひらいて文字を読むと、いらいらがもどってきて、よくない。くしゃみがしきりに出るものだから、中原さんに火鉢に炭をおこしてもらった。

四月六日

マヤが鹿児島の純心学園にもどる日だ。心配した天気がいよいよの日になんだかいちばん悪くなったような気がした。休みで帰って来てまもないころに飛行機の切符は買っておいた。午後妻が空港行きのバスの出るところまで送って行った。そこから空港までは和ちゃんがついて行ってくれる。自動車が古見本通りにまがるところまでうしろを向いて手を振るマヤの笑顔が見えていた。いやもうその半分道のあたりに遠ざかると、表情は見えず、手がちらちらと動くだけだが、笑っている顔が見えるようなのだ。しばらくあとで妻から電話がかかってきた。予約していた便は欠航になったが、次便に乗れそうだからとにかく空港まで自分もついて行ってみると言っていた。空港まではバスで一時間半近くかかる。鹿児島の純心に連絡したがユーゼニアさまはマヤを迎えるために出発してしまったらしい。鹿児島は新空港が四月一日から発足して、市内からは二時間近くもかかる場所だという。到着時刻の変更をなんとかしてユーゼニアさまに連絡してもらうよう、学校には三度電話をかけたが、手配はしたが連絡はついていないと言っていた。巨大な新空港で迎えが見つからず、青ざめふるえているマヤのすがたが見えてくるようでいたたまれず、新空港に直接電話をかけてみたが、出迎え人の呼び出しはできないということだ。わけを話してたのんだところ、とにかく伝えてみようとは言ってくれ

たが、なにやらたよりなく、自分のことばもしどろもどろでびっしょり汗をかいた。受話器をおいたあとしばらくは頭をうつむけてぼんやりしていた。でもそのあとで純心から電話がかかってきて、ユーゼニアさまに連絡がつき、飛行機の変更も知らせたというので、やっと落ちつくことができた。

きょうは客が五人あった。なぜだかわからないけれど、来客の来る日は何組みもかさなることが多い。マヤのことで気もそぞろなときだったから、よけい胸のあたりにざわざわしたさわぎがあった。久しぶりに大阪から帰郷したひと。熊本県下の或る町の町長をしている友人の紹介状を持った、新婚旅行中の夫婦。郷土研究会のひとふたり。

退庁時間になっても妻のもどらぬ家に帰る気にならず、ぼんやり机に向かっていた。なにかを考えようとするが、まとまった考えを追うことができない。一本のすじを貫いて考えなければならぬと思うけれど、そうはならない。立ちあがって窓の外をながめたら、塀越しの下の道にこちらを向いて立っているキミヨちゃんのすがたが見えた。ここ三、四か月ほど遊びに来ないのでどうしているのかと思っていた。この四月に六年生になったせいか、ちょっとおとなびて見えた。頭のはげた太った男といっしょにいて、なにかしゃべっている。その男は学校の教師のようにも見えた。窓ガラスをいきおいよくあけたので、その音でこちらに気づき、てっきり、あ、おじさん、と明かるくはずんだ彼女が見られると思ったのに、なんだか調子がちがっている。顔を横に向けてあらぬ方を見ている。で、つい合い図にあげた右手のやり場を失い、名まえを呼びかけようとした声も殺して立ちつくす姿勢になってそちらを見つめていた。もしかしたら正面に向きなおってこちらに気づきはしないだろうかと。でもそれはほんのまあいの出来事。一台のタクシーが来てふたりのまえにとまり、ドアがあくとキミ

ヨちゃんは小さな貴婦人のように落ちついて先に乗り、そうしてその車は私の目のまえから消え去った。

奄美空港から和ちゃんともどった妻とふたりでおそい夕食を食べているところに（和ちゃんはすぐ帰った）、図書館の宿直が来て、ユーゼニアさまから電話があったと知らせてくれた。マヤとふたり無事学園に帰りついたという。

四月七日

マヤが鹿児島に行ったので妻とふたりきりの生活に復した。マヤが居ると妻への心配が分担される気持ちだが、またそれをひとり占めしなければならぬ。何をしているかとときおりは家に行って声をかけ、元気なのを見とどけてから図書館にもどるのだ。もっともおなじ構内だから、歩いて五十歩とかからないのだけれど。

事務室とのあいだのドアを閉めてみた。窓ガラスもみんな閉めていたから、密室にとじこもった感じだ。なんだか自分に純粋培養を施すようなぐあいだ。からだにおかしなきのこが生えてくるかもしれぬ。中薗に手紙をしたため今年の東欧旅行は困難だと書いた。ずっとそのことを考えていた。出発へのはずみをねらっていた。しかしどうにも行けそうにない。そう書いたあとも、出そうか出すまいか迷った。

四月十二日

風がやみ、空が晴れているときに町を歩くと、南の島らしい充実した感じがよみがえってくる。昼過ぎ、大島支庁構内の自治会館に出かけた。バスの中で窓外に流れる町の景色を見ていたときも、自治会館の二階の、粗製の長机や長椅子を矩形にならべかえた会議場で坐っているときも、もう大方やまいは回復したのかもしれないと思っていた。人々も木々の緑も冬のくぐまりをはねのけて素膚をあらわにした熱気を発散しはじめたようで、とても気分がよかったからだ。人々や木々のそのような状態は、季節の条件がととのえばそうなるが、私の気分がそれにすぐ対応するとは限らないのである。自治会館では「奄美文化財保護対策連絡協議会」の理事会がひらかれた。去年の私は、同じ会場で、いらいらした気分、あの落ちつかぬ一羽の小鳩が胸もとに巣食い、時をえらばずにせわしない羽ばたきをやめない状態をもてあましていた。二六時中それの消滅の期待に疲労していたのだが、羽ばたきはかならず訪れていたのである。その羽ばたきの音を感ずると、私はじっとしてはおられず、と言って何をする気力も湧かないから、きくもの見るもののすべてに感覚が剝離し、確からしさがなくなってきたのだった。ただせかせかしたあせりがからだじゅうに充満し、未来も過去も意味がなくなってしまう。いや過去はまだいくらか手ごたえを残していたにしても、にごり淀んで、いっそうあせりに拍車をかけてくるものとしか思いかえせない。去年の会合のときはまだその泥沼の中に居た。窓越しに見える青葉のいきおいのよさや、ときおり流れ入るさわやかなそよ風も、その快さは過去のにごり

にまみれていて、かえって胸苦しさを覚えさせられただけだった。今年はだから回復したのだと胸いっぱいに空気を吸いこんだ気持ちで、私は安らかな状態を享受していた。川床の深い小さな川をへだててアカギの群葉のあいだから小学校の庭が見え、小学生が鉄棒にぶらさがっているすがたが動いている。幼いその年ごろが誇っているつかのまの筋肉の張りが、距てた距離のたよりなさのためいっそう増幅されたあざやかさでかがやいてくるのも確認できた。もうだいじょうぶかもしれない、と歳月を経た吊橋をためすように自分の鬱をゆさぶってみた。あんなにたやすくそこにまくれこんでしまうあやしげな状態は、もう通りすぎ去ったと思わせる手応えがかえってきてみると、以前のたよりない揺蕩が信じられないほどだ。治癒の道のりを歩きかためてしまえば、よりをもどしてくるっとひっくりかえるあのうつろな胸のゆれの実感は遠くなってしまった。私はひとことも発言しないで会は終わった。去年はいらつきの中で無理にだめ押しに似た発言をしたのだけれど。ほんとうにひとことも喋らなかったと思いながら、木の階段をおり支庁の門の方に近よったときに軽い疲れにおそわれた。突然汗ばみ、だるいと思ったとたんにあやしい気分になった。さっきあれほど確かだったのに、やはりまだかたまってはいないのか。そして文化財保護などという仕事は自分に向かないのだから理事は辞退しなければいけないという考えにつきさされたのだ。せっかく回復できたと思ったばかりなのに口惜しい気がした。ひたすら歩くことがいいのかもしれぬ。容体がもっとひどければ歩くことぐらいではとてもはがれるものではないのだけれど、そんなにひどい状態には思えなかったから、かたまりかかった脳髄がちょっとゆさぶられただけにちがいない。だから二十分ほどの道のりを歩いてみれば図書館に帰りつくまでに自然をたのしく受け入れることのできる気持ちが取りもどせよう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo